

錢形平次捕物控

蹄の跡

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、あつしはもう癩しやくにさはつて——」

ガラツ八の八五郎は、拳げんこつ骨で獅子ツ鼻の頭を撫で乍ら、明神下の平次の家へ飛び込んで來ました。

江戸の町が青葉で綴つゞられて、薰風くんぷうと五月さつきの陽光が長屋の隅々まで行き渡るある朝のこと、

「八の野郎がまた朝つぱらから癩の種なんか持込んで來やがつたぜ。落着いて飯も食へやしねえ」

平次は大きな箸はし箱ばこへ、ガチャガチャと自分の箸をしまひ込ん

で、お静の方へ膳を押しやると、心得たお静は、それを持つてスーツとお勝手へ立ちました。まごくくすると、八五郎に蹴飛ばされさうだつたのです。

「親分、聽いて下さいよ。あつしはもう、癪にさはつて——」

「わかつたよ、又角の酒屋の親爺に先月の拂はらひのことも當て擦こすられたんだらう」

「酒屋に借りなんか拵こぎへるものですか、米屋の拂ひなら半歳も溜めるが」

「あんな罰の當つた野郎だ」

「癪にさはつたのはりやんこですよ」

八五郎は大きな指を二本、腰のあたりに當てて見せました。

「悪い癖だ、武家りやんこと野良犬はからかはない方が良いと言つてゐるのに」

「それがその、放つちや置けなかつたんで——これを見て下さいよ、親分」

八五郎は懷ろ深く探つて、皺しわくちやな紙片かみきれを取り出すと平次の膝の前へ、煙管を風鎮ふうちんに押し伸ばすのでした。

「恐しく下手へたな字ぢやないか。まさかお前が書いたんぢやあるまいな」

「それでも、あつしの字よりは少し筋が良い」

「字のことになると、自慢がないから、八も可愛らしいよ、——それにしても、こいつは鹿尾菜ひじきをバラ撒まいたやうぢやないか、お

前讀んで見な」

半紙一枚へ、馬糞墨まぐそずみで書いた、下手な字が一パイ。

「こいつは讀むのにコツがありますよ。お弓町の多良井藏くらんど人様のお腰元お玉が死んだ。自害といふことになつてゐるが、人に殺されたに違ひない。親分のお力で下手人を擧げて、お玉の怨うらみを晴らして下さい、頼む——とね」

八五郎が辨慶讀みにした手紙の文句から、事件の重大さと、この手紙を書いた者の、燒きつやうな熱意を感じないわけに行きません。

「それでお前へ行つたのか」

「今朝此手紙を投り込まれた時、あつしはまだ寢て居たが、宜い

あんべえに雨戸は隙間だらけだ。枕元へ紙片が舞ひ込んだから、夢心地で拾ひ上げると——あの娘この附け文と思ひきや——」

「思ひきや——と來たね」

「學があるとツイ斯んな言葉が出て來ますよ、——悪い癖でね」

「無駄が多いな、先を急げよ」

「殺されるのは良い女にきまつて居るから、兎も角お弓町へ飛びましたよ。相手は八百五十石取の旗本屋敷だ、誤ごま摩か化して死骸を取片付けられちや後の祭りだ」

「で？」

「裏から入つて、御用人を呼出して、お女中の死骸を見せて貰ひ度いと言ふと、味噌摺用人の山岸作内、大眼玉を剥いて人斬庖丁

をひねくり廻した、——其方は何者だ此處を何んと心得る——と
ね」

「——」

「町方の御用を承^{うけたまは}るもの。明神下の平次親分ところの八五郎と名乗ると、——馬鹿野郎、旗本屋敷へ不^{ふじやう}淨な十手などを持込む奴は、叩き斬つても仔細^{しさい}はないが、命だけは助けてやる。友吉、此^{ひやうろくだま}兵^{つま}祿玉を摘み出せと來た。すると何處からともなく、二十五六の威勢の良い若黨が飛び出して來て、あつしの首筋を掴んで裏門からお弓町の往來へ投り出してしまひましたよ。その野郎はまた、恐しく腕つ節の強い男で——」

「それでお前は尻尾を卷いて歸つて來たのか」

「癪にさはるが仕様がありませんよ。相手は八百五十石の武家屋敷だ、切り込んだところで勝目はないし」

「間抜けだなア」

「あつしはどうせ間抜けですがね、親分」

「まア、腹を立てるなよ八。お前は手順を間違へたんだ」

「ぢや、どんな手順があるんです」

八五郎はまだ紛々^{ぶんく}として居ります。

「お前は、そのお玉といふ腰元の親元を聴かなかつたか。請人^{うけにん}でも宜いが」

「いゝえ」

「それが手順だよ。その腰元の親があるなら親、遠國のものなら

請人が、死骸を引取りに行くだらう」

「成程ね」

「いや、お前には少し荷が重過ぎるだらう。俺が行つて見るとしようか」

「有難てえ、親分が乗り出して下されば」

八五郎はすっかり有頂天になりました。錢形平次が一緒に行きさへすれば、まさかあの味噌摺用人に怒鳴られたり、若黨風情に手籠にされるやうな間拔けなことはありません。

腰元お玉の實家、駒込追分のささやかな絲屋を訪ね當てたのは、やがて晝近い頃でした。平次が行つた時、丁度お弓町の多良井家から『お玉の死骸を引取るやうに』といふ使が來たといふことで、お玉の兄の清三郎が、これから出かけようといふところでした。

平次はそれを引留めて、お玉の父親清吉に逢つて見ました。これは五十五六の中老人ですが、軽い中風^{ちゆうふう}で足腰が不自由な上、娘の不慮の死に打ちひしがれて、まことに正體ありません。平次の問ひに對して、それでも涙の隙から、斯^こんなことを語りました。

「娘が死んだといふ知らせは、今朝早く、お屋敷の若黨の友吉さんが飛んで來て教へてくれましたが、支度や手続きがあるので、

佛を引取るのは追つての沙汰さたを待つやうにとのお言葉で、親類の者が三四人顔を寄せ乍らも、今まで待つて居りました。——娘を武家奉公に出すなんて、私共には氣の進まないことで、小商人の娘に行儀見習は餘計なことのやうに思ひましたが、多良井様からたつてと望まれて、斷わるに斷わられず、一年前に差上げました。

——親の愚痴ぐちでお聴苦しいことでせうが、娘のお玉は評判のきりやう良しで、駒込小町とか何んとか言はれて居りましたので、多良井様ではそれを噂に聞いてのお望みだつたことと存じます。——最初は娘もお屋敷奉公を嫌がつて、宿下がりの度毎にお暇を頂いてくれるやうにと、我儘を申して居りましたが、近頃はこうしたことかそれとも言はなくなつて、喜んで御奉公して居る様子でこ

ございました。何んと申しても十九そこゝの娘のことですから、氣の變るのも早かつたわけでございませう」

父親清吉の話は、愚痴混りまじに際限もなく續きましたが、平次はそれを宜い加減にきり上げて、これから出かけようといふ、倅の清三郎に言ふのでした。

「これには深い仔細がありさうだ。遠い親類といふことにして、あつしも一緒に多良井の屋敷まで行つて見よう」

「さうでせうか、お屋敷で嫌な顔をしませんかね」

清三郎は二の足を踏みます。妹の死骸を引取りに行くのに、岡つ引をつれて行くのは、相手に濟まないと云つた、町人らしい卑ひ屈くつな考へからでせう。それにこの界隈かいわいでは、錢形平次の顔はあ

まりによく知られて居りました。

それに構はず、平次は清三郎と一緒に、空駕籠を釣らせて、お弓町へ行つたことは言ふ迄ありません。

清三郎を迎へた用人の山岸作内は、

「これはくお玉の兄さんか、いや飛んだことだな」

まことにお世辭たらくです。五十年輩の羊やうかん羹色の羽織と共に、世にも人にも摺れた男で、一筋縄では行きさうありません。が、跟ついて行つた平次の顔を見ると、さすがにギョツとした様子で、

「お前は？」

などと眩まぶしい顔をして居ります。

「絲屋の親類でございますよ、へエ」

と言ふ平次の空とぼけた顔も、狐と狸の應待です。

お玉の死骸は、お勝手に近い女中部屋に置いてありました。薄汚く古びた布團に寝かして、さらしもめん晒木綿で顔を隠し、形ばかりの香花を供へてありますが、あたり四方が落莫として何んとなく淺ましさを感じさせました。

「さ、清三郎さん。お玉さんがどんな死に顔をして居るかお前さんの眼でよく見て置かなきやなりませんよ」

平次は死骸の側に脚行みぎり寄ると、顔から胸へ掛けた晒木綿を取つてハツと息を吞みました。髪はひどく亂れて血を失つた娘の顔は蠟ろうふのやうに青白くなつて居るのに、駒込小町と言はれた優れた

きりやうは『死』もまた奪ふ由はなく人形づくつた非凡の端麗さは、半眼に開いた眼に、無限の恨を含んで、一種の艶めかしさを^{なま}感じさせるのです。

「傷は？」

平次は側に突つ立つて居る用人に訊ねました。

「胸だよ」

「清三郎さん、お玉さんの胸を開けて見て下さい」

平次が遠慮して手を引くと、代つて兄の清三郎は、強い意志に引ずられるやうに、妹の胸をはだけてやりました。

白蠟のやうに、圓い胸、美しい陰影を描いた處女^{をとめ}の乳房の下に凄まじい傷口がパクリと開いて居ります。恐らく心の臓を一と突

き、背につらぬくほどやられたのでせう。それにしても、綺麗に洗つて、着物まで換^かへてやつたのは何んの爲、——平次はその眼を用人の山岸作内に移しました。

「可哀想だと思つてな、よく清めて着換へさしてやつたよ」
山岸作内は辯解らしく言ふのです。

三

「お玉は自害したと仰しやいましたな」
平次は、さり氣ない調子で訊ねました。

「何にか、死ななきやならないワケでもあつたのでせうか」

平次は訊き返しました。

「ワケといふほどのこともあるまい。奥で何にかお小言でも言はれたのを、娘心に突き詰めたものであらうか」

「何にか、不首尾でもあつて？」

「いや、不首尾も間違ひもある筈はない。大層可愛がられて居たのだから」

「自害と申すと、刃物があつた筈と思ひますが」

「お玉の荷物の中に、たしなみの短刀があつた筈ぢや」

作内が指した^さしたのは、部屋の隅に丸めてあるお玉のさゝやかな荷物でした。兄の清三郎が平次の目配せに應^{こた}へてそれを解くと、女物の華奢な短刀が一口^{ふり}、何んの仔細もなく轉げ出します。

抜いて見ると、よく拭き込まれて、一點の曇もない刃金が、薄寒く人の顔を映すのです。

「この短刀には血曇りがありませんね」

「――」

用人作内はギョツとした様子です。

「それに傷口に比べて、刃があんまり狭い、――刃物が違やしませんか、御用人」

平次は少し開き直りました。

「いや、それは私が悪かった。お玉が自害したのはその短刀ではなかった。待つてくれ」

用人の山岸作内は、ソハソハと部屋を出て行くと、やがて奥の

方で、何やらゴトゴトやつて居る様子でしたが、暫らく經つと、細身の刀をひとふり、怖いもののやうに持つて來ました。

「これぢや、——お玉は此刀でやつたのだ」

平次は受取つて打ち返し打ち返し眺めました。細身の蠟塗鞘、
 赤銅しやくどうと金で牡丹ぼたんの目貫めぬき、柄絲つかに少し血が浸にじんで居りますが、
 すべて華奢で贅澤で、三所物も好みがなかくに厭味です。

抜いて見るとベツトリ血ちあぶら脂あぶらが浮いて、切つ尖に少しばかり新しい齒こぼれのあるのは、一種の凄味をさへ加へるのです。

「こんな長い物で自害をしたと仰しやるので？」

平次は作内のとぼけた顔を見上げました。

「左様」

「十九や二十歳はたちの若い娘が、こんな寸延すんのびの得物を背中へ突き貫ぬけるほど自分の胸に突つ立てられるものでせうか」

「それがどうしたといふのだ」

山岸作内も氣色ばみました。それほど平次の調子には妥協的なものがなくなつて居たのです。

「お手打ならお手討で、何んの爲の御成敗と仰しやつて頂けば、親兄弟あきらも諦めやうがありますが、二尺五六寸もある刀で胸を突き貫かれて、自害にされてしまつちや、當人が浮ばれません。ね、御用人、そんなものぢやありませんか」

平次は眼の前に突つ立つて居る用人を見上げ乍ら、急所々々を押へて、ヒタヒタと改めて行くのです。

「無禮だらう、此處を何んと心得る」

作内は日頃の調子を取戻して嵩にかゝりました。

「無禮が聞いて呆れますよ。^{あき}可愛い盛りの娘一人を殺された親なり兄弟なりの心持になつて御覽なさい」

「え、もう我慢のならぬ奴だ」

「我慢がならなきや、何んとでもして貰ひませうか。^{はぐか}憚り乍らあつしが大きな聲を出せば御門前に待たして置いた、あの顎の長ん^{あご}がい野郎が、龍の口まで飛びますぜ」

「何んだと？」

「此處へ来てこんな口を利くからには、調べるだけの事は調べてあります。御係りの御目付へ申上げて、——」

平次は立ち上りかけたのです。このまゝ龍の口評定所に駆け込み、多良井家の内幕の紊亂びんらんを訴へれば、平次も無事で済まない代り、多良井八百五十石も木葉微塵に吹き飛ばされないとともに限らないでせう。

美しいお腰元を手討にするやうな、大旗本の内輪を洗へば、ボロが出て来るに決つて居ります。その頃大小名から大旗本まで、取潰し政策に夢中になつて居た幕府は、何にか知らいんねん因縁をつけるだけの材料を握つて、家事不取締とか何んとか、うまい名目をつけ、八百石でも千石でも、幕府のポツポに取り上げるに相違なかつたのです。

徳川幕府も天下を取つた當時などは、権力を確立することに急

で、創業早々大小名を取り立て過ぎ、秩祿ちつろくをやり過ぎました。二代、三代と代を重ねて、一應天下靜謐せいひつとなると、一度やつた祿が惜しくなり、難癖をつけてはそれを取り上げるのが、隱密裡の一つの政策になつて居たことは歴史を引合ひに出す迄もなくあまりに明かなことでした。

四

「ま、お玉の身寄の方ださうで、飛んだ氣の毒なことをしました。いづれ使の者を差し遣はす筈でしたが序ついでと言つては何んだけれど、少しばかりの志こころざし——これを納めては下さるまいか」

品の良い四十二三歳の内儀でした。靜かに入つて來ると、尊大な――がひどく慇懃いんぎんな調子で、持ち重りのする奉書包を一つ、清三郎の前にピタリと置くのです。少なくとも小判で二十兩くらゐは入つて居たことでせう。

「飛んでもねえ、強請ゆすりに來たわけぢやありません」

平次はツイ斯かう言つてしまひました。その金包を取上げて、取澄ました内儀の顔に叩き付けてやり度い衝動に驅られて居たのです。

「強請――ホ、ホ、そんなつもりで差上げるのではない。これはお玉の兄さんに差上げる世間並の手當と香かう奠でん――お前に上げるわけではありません」

お内儀の顔は冷たくて、空笑ひさへ凍り付いて居りますが、その言葉は驕慢けうまんで戰鬪的で容赦を知らぬものでした。

「親分、もう宜いぢやありませんか。こんなことで歸りませう。

お玉のにふくわん入棺の支度もしなきやなりません」

卑屈ひくつらしい清三郎は、平次の袖を引くのです。長いものに巻かれつけて居る江戸の町人達は、どんなことがあつても、武家のしかも大身とは争ふことは出来なかつたのです。

お玉——殺されたに違ひない、あの美しいお玉の兄の清三郎が斯んな氣になつては、武家の『斬捨御免』を、とつちめる氣で來た平次も、陣の立て直しやうはありません。旗本は若年寄の支配で、一たびその門を潜ると、町方の役人も岡つ引も何んの權力も

なく、もとより十手捕縄などは物の役にも立たなかつたのです。

「山岸、何時まで手間取るのだ、——奥も宜い加減にせい。町人共をのさ張らせるのも程があるぞ」

ノツシノツシと廊下を鳴らして来て、開けてある障子から、又ツと顔を出したのは、八百五十石の當主多良井藏人でせう。四十五六の酒肥りのした醜みにくい中年者で、平次をハタと睨んだ眼には容易ならぬ忿怒が燃えます。

此處で開き直る術てを、平次は知らないではなかつたのですが、後の祟たりを怖れて、必死に停める清三郎の顔を見ると、旗本相手の自分の態度も酔狂らしくなります。

平次は怨みを呑んで引揚げました。せめて、お玉の死骸を駕籠

へ乗せてやる手傳ひをしたのを心やりに。

「あれは？」

駕籠が上がるのを、縁側から見送つて居る若い男が、平次の注意をひきました。

「若様——有馬之助様で」

清三郎は囁ささやきます。二十二、三の若い侍、にきびだらけの大馬面で、うら淋しくお玉の死骸を見送つて居るのは、平次にいろ／＼のことを考へさせます。

「野郎、氣をつけやがれ」

裏門のところで、危ふく駕籠の棒鼻に突つかゝりさうになつて、ポンポン言つたのは、二十五六の逞たくましい男でした。今朝八五郎

を門から投り出したといふ、強い若黨の友吉といふのでせう。

色の浅黒い、眼鼻立ちのキリリとした、なか／＼良い男ですが、妙に押へきれない忿怒を沸^{たぎ}らせて居るのは、主人の威光を笠にきての虚勢でせう。

「へ、相済みません」

清三郎は素直に謝りました。

門を出ると平次は、其處に突つ立つて居る八五郎を呼びました。「お前はこの屋敷の中のことを洗ひざらひ探つて見てくれ。出入り商人は、飛んだ突つ込んだことを知つて居るものだ」

「へエ、——ところで、お腰元はやつぱり」

「立派な殺しよ、——お前の言ひ草ぢやねえが、殺しとわかつて

も手が出せねえ。癩しやくぢやないか」

「ね、矢つ張り親分だつて癩にさはるでせう」

八五郎は鼻の下を長くして居ります。

「宜いてことよ——ところで清三郎さん」

「へエ、へエ」

「あのにきびの化物が、お玉さんにうるさくはしなかつたのかな」

「そんな様子でございました。妹がお暇を頂き度いと言つたのは、若様がうるさいからだつたさうで」

「それが——」

「今年になつてから、ふつゝりそんな事を言はなくなりました。こればかりは私にもわかりませんが——」

「娘心は謎なぞだな」

平次はそんな心得たことを言ふのです。

五

それから二た月あまり、無事な——が鬱うつ陶たうしい日が續きました。旗本多良井家の腰元の死は、それつきり大した騒ぎにもならず、闇から闇に葬られてしまったのです。

多良井家から絲屋清三郎にやつた金は二十兩、清三郎はそれを商賣に廻して、いくらかの利潤もうけを見たことだらうし、八五郎を動かして、一應多良井家の内輪を探らせた平次も、それを言ひ立て

て、多良井家に目に物見せるわけには行かなかつたものか、何も彼も無事にそして平凡に日が経つて行くのでした。面白くないのは平次でした。明らか^{あき}かな殺しを眼の前に見せられ乍ら、身分の隔^{へだ}てに妨げられて、それをどうすることも出来なかつたのは、思ひ出すごとに、平次の心が翳^{かげ}ります。

神田祭が過ぎて、兩國の川開きも遠い噂になつた或日。

「御免」

平次の家に思ひも寄らぬ人が訪ねて來ました。五十年輩の四角な顔、表情といふものを持たない眼鼻。

「これは、山岸様ぢやありませんか」

女房は留守、自分で客を迎へた平次も、さすがに驚きました。

旗本多良井家の用人、山岸作内が其處に立つて居るのです。

「錢形の親分、いつぞやは飛んだ無禮をいたしたな。いや、實を申すと奥様がお氣が付かれないのでな、もつと早く出すものを出せば宜いのに——」

この味噌摺用人は、二十兩の小判の餘徳に預りでもして平次は悉く満足して居るものと思ひ込んで居る様子です。

「いや、飛んでもない。ところで御用は？」

平次は早くこの用人に歸つて貰ひ度さで一ぱいでした。

「火急の用事ぢや。實は多良井家の若様が、飛んだ間違ひで亡なくなられたので」

「えッ」

あのにきびだらけの大馬面^{づら}が、フト平次の眼に浮びました。

「昨日若黨の友吉をつれて、雜司ヶ谷へ遠乗りに行かれたが、鬼^き母神^{しも}様の森の蔭で、友吉が茶店へ中食の茶を貰ひに參つた後で、馬に蹴^けられて御落命ぢや」

山岸作内は、さすがに眼をしばたゝきます。

「それは、それは」

平次もまさに二の句が繼げません。

「旦那様が腑^ふに落ちないところがある、友吉は無類の忠義者で、嘘を言ふ筈はないが、馬は手馴れの青で、猫の子よりもおとなしい、——場所は鬼子母神裏の、百姓家の物置であつたといふが、どうも近くに人氣のないのを幸ひ、誰かが若様^{あや}を害めたのではあ

るまいか——と」

山岸作内は額の脂汗を拭くのです。

平次は丁度來合せた八五郎と一緒に、即刻お弓町に向つたことは言ふ迄ありません。

平次の氣持も知つてか知らないでか、多良井家の待遇は慇懃^{いんぎん}を極めました。

奥へ通されると、入棺するばかりになつて居る、有馬之助の死骸を挾んで、主人の藏^{くらんど}人と、奥方のお由良は、曾^{かつ}つての日の虚勢もなく唯さめ／＼と泣いて居ります。

「平次殿か、倅は此有様だ。見てくれ」

藏人は有馬之助の死骸を指さして、平次に席を譲ります。

「御免下さい」

死骸の側に進んだ平次は、その慘^{さんたん}憺たる有様に先づ息を吞みました。若様有馬之助は、左の顱^{こめかみ}顱を割られ、顔が曲つたやうになつて死んで居るのです。

割られたこめかみには明らかに徑二寸五分ほどの圓い跡がありました。馬の蹄^{ひづめ}でもなければ、これほど強く打つ筈もなく、骨も碎け肉も飛び散つたのは、何んとしても恐しい力です。

「どうであらう、平次殿」

主人の多良井藏人は、緊張した顔をのぞかせます。

「何んとも申上げられません。お厩^{うまや}を拜見して、次第に依つては、若黨を案内に、雑司ヶ谷まで行つて見るといたしませう」

平次は用意周到でした。其處から直ぐ裏の厩へ行つて見ると、無愛想な若黨の友吉は、一生懸命馬の手入れをして居ります。

「お、錢形の親分」

友吉の眼にも、いつぞやとは違つたものがありました。

「若主人を蹴殺した馬を、そんなに丁寧に世話するのか」

平次の言葉は妙に皮肉でした。

「畜生は何んにも知りやしない」

友吉は相變らずブツ切ら棒です。

「その馬は人を蹴^ける癖があるのか」

「飛んでもない、猫の子よりおとなしいぜ。それよりもう十二歳だ、遠乗りには無理さ」

「昨日間違ひのあつた時、馬の氣が立つて居る様子がなかつたのか」

「そんな事があるものか、若い馬ぢやあるまいし」

友吉の答へには何んの蟠わだかまりもありません。

六

八五郎に何やら言ひ含ふくめて、多良井家に残したまゝ、平次と友吉は、つれ立つて雑司ヶ谷に向ひました。

無口で無愛想な友吉は、平次がどんな水を向けても打ち解けません、斯う一緒に歩いて居ると、人と人との接觸から、平次は

異様なものを感じて居たのです。

それは、この友吉といふ若黨は、ブツ切ら棒で無愛想な癖に、何んとも言へない良いところのある男で、若黨擦れがして居ないばかりでなく、傍に居る者に、五月の薫風くんぷうのやうに爽やかさを感ぜさせるのです。多分それはこの男の性格の生一本きさ、純情で正直なところから来る良さだつたかも知れません。

「此處だよ、——俺がお茶を貰ひに來た茶店は」

友吉は鬼子母神きしも様の茶店の一軒を指さしました。茶店の小娘は、友吉の顔を知つて居たらしく、遠くの方から會釋かいせきをして居ります。平次はその茶店に立ち寄る氣もないらしく、友吉を促うながして、社の裏の森の中に、昨日馬を繫つないだ場所を捜させました。いや、捜

す迄もなく、其處には近所の百姓家の物置が、何も彼も昨日のまゝに、二人を待つて居たのです。

「馬を繋いだのは此處で、若様が蹴^けられて倒れて居たのは此邊だ
が——」

一本の柱、その側の草にこぼれた血潮。平次はそれも見ようとせず、物置の中に入つて何やら熱心に捜して居りましたが、やがて、

「これだ、——これが見付けたかつたのだ」

さう言ひ乍ら、お百姓が、薪^{まき}や炭や野菜などを量るために使つて居るらしい、恐しく、大きな棒^{ぼう}秤^{ばかり}と、でつかい分^{ぶん}銅^{どう}を持つて來たのです。

「――」

友吉はげんさうにそれを眺めて居りましたが、一言も口をきかうとはしません。

「あのこめかみの傷跡は、馬の蹄ひづめにしては小さ過ぎると思つたよ。棒の先に分銅を縛つて後ろから、喰はせると丁度あんな傷になるのだが」

平次は棒秤かぎの鉤の先に分銅を縛り付けて、力任せに振つて見せました。

「この通り」

恐しい勢ひで風を剪きつた分銅が、物置の柱へ、狙ひ違はず叩き付けられると、凄じい音がして、荒削りあらけづの松の柱が、お椀型に

二分ほど凹みます。

「若様のこめかみは、松の柱よりはヤハだ。これを喰つちや一とたまりもあるまいよ」

「――」

「ところで、――お弓町では八五郎が、お前の荷物を搜して居る筈だ。女の物――お玉の形見が一つや二つはあるだらうし、あのお玉の殺された時、八五郎の家へ投り込んだ手紙と同じ筆跡てで書いたものも、必ず見付かるに違ひない」

「――」

平次の論告は峻しゅん烈れつで容赦ないものでした。が、友吉はそれに應こたへようとせず、何處ともなく茫然と見詰めて居ります。そ

の眼の裡には、深刻な感情が雲のやうに動いて居りますが、それがどんなものか、平次にも讀みきれません。

「お玉が殺された時、八五郎のところへあの手紙を投り込んだお前が、有馬之助を殺したのは仔細があらう。——言ひ度くなきや、俺が言つてやつても宜い。お玉は最初若様の有馬之助に付き纏まとはれて、あのお屋敷に居るのを嫌がつて居たが、——今年になつてから、それを言はなくなつたのは、お前と言ふものが出来たからだらう」

「——」

「お前とお玉の仲がよくなると、若様の有馬之助がお玉を殺す氣になつた。あの刀は華奢きやしやで、贅澤で大旗本の馬鹿息子でもなき

や差さない代物だ^{しろもの}」

「あの野郎がお玉を手籠にしたのだよ。二度や三度ぢやない、あの晩も言ひ寄つて手ひどく弾^{はじ}かれ、カツとのぼせてお玉を殺してしまつたのだ」

友吉は始めて口をきりました。思ひなしかその健康な頬は瘦^やせて、大きな眼には一パイの涙が溢^{あふ}れさうです。

「それから？」

平次は靜かに誘ひました。

「お玉が可哀想だ。あのにきび野郎に手籠にされた上、芋刺^{いもざ}しにされちや浮ばれねえ」

「――」

「お玉は俺の女房だ。忘れもしない暮の二十八日に二人は夫婦約束をしたんだ——それを蟲けらのやうに殺されて黙つて居なきやならないと言ふのか。八五郎親分のところへ手紙を投り込んだのは、間違ひもなくこの俺さ、——駒込のお玉の親許へ行く時、向柳原まで一と足伸したんだ」

「――」

「折角せつかく錢形の親分が來ても、あの通りだ。武家の馬鹿息子が、十九の可愛い娘を殺しても町方の御用聞には縛る繩はなかつたんだ」

「――」

平次も眼を伏せました。まさに一言もありません。

「二た月俺は辛棒したぜ。ヨボヨボの年寄馬に乗つて、一かど遠乗りのつもりで來たこの物置で手頃のぼうばかり棒ふんどう秤と分銅を見付けたのが、あの馬鹿息子の運の盡きさ」

「――」

「さあ、縛つて貰はうか、錢形の親分。故郷の佐倉へ飛んで行つて、たつた三日でも、年を取つた母親に孝行をしてから、立派に名乗つて出ようと思つたのが、俺の未練だ」

若黨の友吉はさう言ふと、青草の上にドツカと腰をおろして、自分の手を後ろに廻すのです。

「よし、解つた。そんな氣であるのなら、俺は詮せんさく索をするんぢやなかつたよ」

「――」

友吉はパツチリ眼を開いて平次の顔を見上げました。

「若様有馬之助は、ヨボヨボの年寄馬に蹴^けられて死んだのさ。そして若黨友吉は一期半期の奉公人だが若様が死んださびしさに黙つて故郷の佐倉へ歸つたのだ」

「――」

「俺は町方の岡つ引き、旗本屋敷の奥に何んな事があらうと知るものか。それぢや友吉さん、達者で暮すが宜い」

平次はクルリと背を向けると、何んのこだはりもなく歸つて行くのです。

「親分、有難い」

その後ろ姿を伏し拜む友吉は、平手で拂ひきれぬ涙を拂ひ乍ら、この恩人の後ろ姿を、自分の眼に焼付けて居るのでした。

×

×

×

「おや、親分」

目白坂で逢つたのは、汗みどろになつて驅けて來た八五郎でした。

「何處へ行くんだ、八」

「心細いな、親分。あの若黨友吉の行李かうりの中から、お玉の簪かんざしと半襟はんえりが出て來ましたよ。それから、あの下手つ糞くそな手紙は、友吉

の筆跡てに違ひないこともわかつたんだが——」

八五郎の鼻は蠢うごめきます。

「そんな物はもう要らないよ、——有馬之助は矢つ張り馬に蹴られて死んだんだ」

「へエ？」

「だが、一つ頼みがある。お前の早い足で行つて見るが宜い、鬼^き子母神様の裏の木立にまだあの男がウロウロして居るかも知れない。お玉の形見の簪^{かんざし}と半襟を渡してやつたらさぞ喜ぶことだらう」

「——へエ——」

「それから歸りは明神下の俺の家へ寄つて見るが宜い、——今日は嬉しい事があつたんだ。一本つけて待つて居るぜ」

平次はさう言ひ捨ててスタスタと目白坂を降りて、戀女房のお靜の待つて居る明神下の長屋へ急ぐのでした。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第二十五卷 火の呪ひ」同光社

1954（昭和29）年5月10日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋新社

1949（昭和24）年6月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「蟬」に対するルビの「らふ」と「ろふ」の混在は、底本通り

です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2017年1月20日作成

2017年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

蹄の跡

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>